



八千代市郷土歴史研究会
会長 村田一男
事務局 八千代市勝田台3-24-10 牧野方

お知らせ

**平成18年度
定期総会と会員発表会のお知らせ**

4月9日(日)
定期総会 10:00~12:00
会員研究発表会 13:30~16:00
八千代市立郷土博物館にて

会員の皆様には、このお知らせをもって総会開催通知といたします。ご欠席の方は委任状を事務局までお送りください。

2月12日(日) 学習会
13:00~ 八千代市立郷土博物館にて
大和田新田調査研究の基本資料と課題

3月5日(日) 拡大役員会
13:00~ 八千代市立郷土博物館にて
役員のほかどなたでもご参加ください

3月19日(日)
品川宿と大森貝塚の史跡めぐり
JR大森駅改札口 10:30 集合

- ・コース: 品川歴史館~大森貝塚~品川宿
- ・東海七福神めぐりの成果をふまえ、大和田新田に建立された成田山参詣道標の寄進者「品川宿和国屋」を探索します。
- ・勝田台発快速 08:57~新橋 10:07~大森 10:20



05.11.20 豊田市長が郷土史展に会場

17年度八千代市民文化祭参加行事
「郷土史展」は
盛況のうちに終了しました

とき: 11月19日(土)午後1時~5時
20日(日)午前9時~午後4時
ところ: 勝田台文化プラザ 2階展示室
テーマ「旧高津村のすがたと人々」

参加者数 19日 = 90名(内会員26名)
20日 = 93名(内会員27名)

展示内容

- 1.高津姫伝承と観音寺縁起の考察
 - ・「高津山観音禅寺境内観音堂本尊縁起」
 - ・伝説のルート
 - ・「観音寺本尊縁起」関係年表
 - ・「観音寺縁起」の構成
- 2.「高津姫物語絵巻」
- 3.高津ムラの構成基礎資料
 - ・古文書に見る屋号一覧
 - ・古文書資料一覧
 - ・観音寺保存文書から
 - ・村方三役
 - ・「間宮士信公逝去葬式略記録」
- 4.高津ムラの信仰
 - ・高津の皆さんがたどった吉橋大師八十八ヶ所遍路行程図
 - ・高津観音堂「六番ご詠歌額」のなぞ
- 5.石造物群像
 - ・石碑銘文から見る高津ムラの変遷
 - ・高津山観音寺の戦没者墓碑
 - ・高津と八千代市内の女人信仰に関わる石造物の変遷
 - ・高津の廃寺正福寺について
- 6.高津の民俗
 - ・高津の女人信仰の民俗
 - ・高津比咩神社のハツカビシヤ
- 7.観音寺所在の韓国式鐘楼
- 8.その他
 - ・八千代市内の狛犬たち
 - ・八千代市郷土歴史研究会のこの一年

千葉県郷土研究発表大会に参加して

小菅 俊雄

千葉県郷土史研究連絡協議会は県下各地で地域史研究に励む会員約80名ほどからなり、30年以上の多彩な活動歴を持つ。毎年開催される研究発表大会は会員たちが一堂に会し日ごろの研究成果を発表する。今回、平成17年度の研究発表大会を八千代市で開催することになり、八千代市立郷土博物館で12月18日に実施され、博物館がホスト役、会場の設営などは我が郷土史研が裏方としてサポートした。

当日は晴天だったが、寒い強風が吹き荒れているなか、県下から115名の参加者を迎えて、盛大に開催された。定刻、村田博物館長の司会のもと、旗本研究では第一人者と言われる川村優会長の開会の挨拶、ついで八千代市教育委員会生涯学習部長が来賓として挨拶されて会が開かれた。

研究発表のトップは、我が郷土史研の若手ホープの藤本涼輔君の「二十四孝について」

小学3年のとき、お母さんがお姑さんの介護に献身的に努められる姿をみて、お母さんを二十五孝にしたいという願望から、二十四孝に興味を持った経緯からはじめて、萱田の飯綱神社の玉垣の二十四孝の調査から、庶民教育の教材とされた二十四孝は何を伝えたかったのかという研究を進め、親孝行の話が多いがその裏に何があるのかという考え方にふれ、更にスライドで県下の寺社にある「孟宗」の彫刻の諸相を解説した。落ち着いた語り口で高校3年とは思えぬ内容の発表であった。なお村上昭彦さんと共著の「八千代市建築調査報告書」が館長より紹介された。来年は国学院大学に進学が決った由で大成を期待したい。

次に我が会の副会長で一級建築士の牧野光男氏から「八千代市観音寺所在の韓国式鐘楼について」

高津の観音寺の境内に異彩を放つ鐘楼は、大正十二年の関東

大地震の際に、不幸にも犠牲になられた、朝鮮人の供養のために韓国から梵鐘と共に贈られたもので、この鐘楼の特色について、建築学的な見地から写真を投影し、素人にも分かるように丁寧に特殊な建築技法の説明をなされた。瓦の葺き方、梵鐘の形態や刻まれた文字などの説明をされ、最後に「慰霊詩塔」の七言絶句の紹介をされた。

午前最後の発表は、高校の教員であられ、又千葉県日本・韓国関係史研究会の松本松志氏の「朝鮮通信使と閑宿藩について」

閑宿藩の家老であった亀井家から発見された仕宦録(業務日誌)を解説されている経緯と書契(朝鮮通信使との外交責任者間の交換文書)との関連について大分なコピーを回覧した上で通信使来訪の意義やその意味について説明をなされた。当時の大名家の内情や贈答ともてなしの文化にふれて、興味深い発表であった。

午前の発表を終了、昼食休憩に入る。配られたお弁当を食べながら少時歓談し、午後の部に入る。

県立現代産業科学館上席研究員の植野英夫氏の発表は「下総国印西庄龍腹寺宝塔棟札について」

龍腹寺の略縁起から宝塔の棟札の説明にはいる。伝承からは宝塔は五重塔で、嘉吉2年(1442)に着工、宝徳3年(1451)に完成し、大壇那は千葉胤直・胤賢で棟札は全国的にも珍しい銅造であった。その後幾多の災厄をへて、断碑となった棟札を接合して表、裏の銘文から、その歴史的意義についての説明があった。以上で研究発表は終了。

14:00 から記念講演として東京成徳大学の鶴巻孝雄教授が「(報じられた房総)を読む - 新聞記事を手がかりに文明開化を考える」という演題で話された。教授は大学において房総地域文化研究プロジェクトを主宰されている。お話は新聞記事は房総をどのように見たかということで、東京日日新聞・横浜毎日新聞の明治6、7、8年の記事から拾ってみた房総についての

イメージ(墮胎の悪弊や博徒の横行など悪い印象。また一方では海産物の豊富なことなど)をとりあげ、また県令柴原和の評判に及び房総の文明開化に言及、文明開化期の新聞に大きな意味を与えた投書の役割などを述べられた。新聞記事の資料など多くのレジュメを示され非常に興味の深い講演であった。

定刻 15:30 川村会長の各発表者や鶴巻教授に対する懇切な謝辞を閉会のことばとして散会した。実りの多い一日、裏方を勤めた会員の皆様、ご苦労さまでした。

12月23日(午前)

浅間内遺跡出土品を見る

藤 由美

12月23日例会の日の午前中、会員11名が「八千代市文化財整理室」で、1年前の12月例会で見学した浅間内遺跡から出土した土器などの遺物を見せていただきました。文化財整理室は、例会の集合地からすぐの西高津小学校内にあり、浅間内遺跡の調査を担当された八千代市教育委員会の常松氏が今回も案内役を勤めてくださいました。



浅間内遺跡の調査は、村上駅周辺の区画整理に伴って、1994年から2004年11月まで行われ、現在、出土遺物の整理と記録作成が進められています。

遺跡からは奈良時代から平安時代初頭の集落跡のほか、旧石器から縄文・弥生時代の遺構や、古墳の墳丘も発見されていて、出土品の種類も多く、特に弥生後期の附加条縄文土器や「郡」の墨書のある土師器、中世の古瀬戸の瓶子するなど興味深いものばかり。彩色された土師器については、積極的な質問や意見も交わされ、充実した見学会でした。

12月23日(金)12月例会
大和田新田の歴史散歩
佐藤 洋樹

午後1時、参加者26名が高津団地バス停に集合しました。風もなく暖かな陽射しの中、来年度の研究テーマを考えながら大和田新田一番地へと歩き始めました。自衛隊の演習場に沿って演習場内にある旧高津川支流の源流や野馬よけの土手を見ながら、新木戸の交差点に向かって歩きました。

「ここが大和田新田一番地です」という村田先生の声で、いよいよ大和田新田の散策の始まりです。一番地は中華料理屋さん、二番地は材木屋さん、と見ているうちに新木戸の交差点に着き、成田山道標(A01)の道路反対側にある血流地藏道標(A02)の解説が始まります。

新木戸交差点は私の通勤路でもあるので、毎日の様にこの道標を見ているのですが、そのたびに「誰かがこの交差点であの道標にぶつかったんで修理したんだなあ」くらいに思っていました。ところが、折れた事情はわかりませんが、道標の復元が当研究会の手になっていたことがわかり、入会一年の私にとっては会の活動の大なる貢献と影響力を痛感しました。

新木戸交差点を北に渡り、細い路地を左に入ればしばらく歩くと、目の前には広大な造成地が現れました。船橋市の「芽吹き之杜」というのだそうで、うっそうとした「森」の頃を懐かしく思い出していると、先ほど自衛隊の演習場で見てきた野馬よけの土手の続きがあることを教えられ、自分が立っている八千代市側に50mほど残っている部分を見ながらあれこれ質問しました。造成中の谷をはさんだはるか向うの土手にも一部残っているとのことでしたが、八千代市側の土手に生えている樹木には、伐採予定の赤いテープが巻かれていて、以前は2mくら

いの高さがあったらしい歴史的地形も消え行く運命であることを知って、都市化の波に吞まれてゆくはかなさを感じながら次の見学場所に移動しました。

造成地から木下街道に戻り、少し北に歩いたところにある墓地を見学しました。「なかなか見つからなかったのよ」という声が聞こえ何のことかと見てみると、そこには古い墓石(A03)がありました。この墓石の向かって左側の面には、「右よしはしヨリきおろし 左たかもと又左つほい」と刻まれていて、道標でもあった事がわかりました。墓石も道標になっていることを知り、4月からのフィールドワークでは見落としをしまいと決意しながら、造成が進んで以前とは様子が変わってしまった新木戸をあとにしました。

墓地から住宅地を通って成田街道に出て、成田方面にしばらく歩くと八幡神社の森が見えてきました。冬の太陽はだんだん西に傾き、神社の隣のお宅では植木の剪定をされていました。それを見て、明日は私も年末の大掃除をせねばならぬと少々暗い気分になりました。

八幡神社に着き、今年の郷土史展で掲示されていた狛犬を思い出してその特徴を再確認したり、本殿に参拝したり、本殿脇の石造物などを見たりと、参加者がそれぞれのテーマ探しに熱中していました。



しばらくして、本殿脇のイチヨウの木の下で何名かの会員が聞き取りをしていることに気づきました。その中心には、先ほど植木の剪定をしていた神社の隣のご主人がいました。神社の総代で、我々の調査を好意的に受

け入れていただき、いろいろとお話を伺いました。

八幡神社からさらに成田方面に歩くと石塔群が見えてきます。以前は土の丘に石塔が並んでいましたが、現在はコンクリートできれいに整地され、整然と石塔が立っています。この石塔群は、通勤途上で毎日の様に見ていますが、今日初めてその敷地に入り、間近に石塔を見る機会を得ました。多くの石塔の奥に、神社があることがわかったのは、今日のフィールドワークの一番の収穫です。

神明社という名前も初めて聞き、さらに、道路造成に伴って神明社が移動したときに石塔群も整備されたそうで、毎日の様に見ているものでありながら何も知らないことを改めて実感しました。

そろそろ暗くなるので、今日のフィールドワークも終わりかと思っていたら、すぐ近くに大和田新田上区区長宅があることを八幡神社で教えていただいたので、皆でご挨拶に伺うことにしました。その途中には、八千代市立郷土博物館に仮設されている「なりたミち」の道標(A09)があった場所があり、道路が完成したときには、この場所に道標を戻すことを知りました。道標の所在が、一時地元の方々からわからないことがあったことも聞き、道標を戻すことを申し送っていき、必ずこの場所に戻して欲しいと心に思いました。

上区区長さん宅は牧場で、お忙しい中をお伺いしてこれからの調査研究の協力をお願いしました。過去にはいろいろな方が調査のために訪れている様で、先ほど見てきた野馬除の土手の話も出て、先ほど見た土手を思い出しながら話を伺いました。

このあと、メンバーは終着地の八千代緑が丘駅に向けて歩き、午後4時に無事終了しました。さて、来年はどんなテーマで研究するか、よく考えようと思っています。

平成 18 年 1 月 8 日
新春恒例七福神巡り
福田 和雄

今年は品川から大森まで、ほぼ旧東海道に沿った「東海七福神」の寺社を逆のコースで巡る。京急大森海岸駅改札口前に午後 12 時 30 分集合。藤さんの点呼が終わり、参加者 30 名、村田会長よりご挨拶があり、牧野事務局長、小菅さん、鈴木さんのご案内で 12 時 45 分頃出発。快晴に恵まれ風もほとんどなく絶好の日和となり皆さんの足取りも軽い。

1・磐井神社（弁財天）

第 1 京浜国道の歩道に沿って少し南下すると、歩道の脇に磐井の名の由来ともいわれる古井戸の説明板がある。右側に神社があり、入り口の両側や境内に赤地に東海七福神と白抜きの幟がはためき、参拝者を迎えている。社殿は朱塗りの建物に銅板葺きの屋根が緑青色に映えて美しい。延喜式内社で武州の八幡総社に定められた由緒ある古社と伝えられる。

「笠島弁財天」は境内左手の弁天池畔の小さな社に祀られている。初穂料 300 円を納め御朱印帳に御朱印をいただいた。その時いただいた栞には万葉集第 12 巻に載る「草かけのあら井の崎のかさしまを見つや君のやまぢ越ゆらむ」の歌が紹介されている。



2・鈴ヶ森刑場跡

第 1 京浜国道と旧東海道が二股になっている空き地が刑場跡の一部である。金網で覆われた首洗いの井戸をのぞいて見た。何となく薄気味悪い。底石がすか見え、水はなかった。近

くに礫や火あぶりの柱を立てた土台石が並んで置かれている。石の真ん中に四角の穴があけてあるのが礫用、丸い穴があけてあるのが火あぶり用だという。刑死した罪人を供養して題目供養塔や六十六部供養塔などが建てられている。隣接して大経寺がある。

3・天祖諏訪神社（福祿寿）

鈴ヶ森から旧東海道を北へ、品川方面へ向かった。立会川の手前、参道を入った所に天祖神社がある。ご祭神は天照大神で、福祿寿は正面神明造りの本殿右側に祀られている。お参りして御朱印をいただいた。

4・浜川橋（通称涙橋）

立会川に架かる浜川橋は北詰めにある説明板によると、処刑される縁者が此所まで来て別れを悲しんだことから涙橋といわれるようになったという。

5・海運寺

旧東海道を北へ、今の東大井から南品川へ入る。海運寺は千体荒神として知られ、竈の神様、台所の神様として庶民の信仰を集めていた。境内に可愛らしいお地藏様が赤い前垂れをかけて鎮座している。説明板によると悪い仲間へ殺された、正直者の乞食の平蔵を偲び供養するため建立した地藏様で、それを人々は平蔵地藏と呼ぶようになったという。

6・品川寺（毘沙門天）

入り口の左に露座の地藏が厳かに鎮座している。真言宗醍醐派別格本山で、山門は江戸時代の建立、境内の奥右手のお堂に祀られている。参拝して御朱印をいただいた。境内には立派な鐘楼があり、十三重の石塔が建つ。又地藏菩薩、宝篋印塔、三猿庚申塔など石造物が数多くある。樹齢 600 年といわれる大銀杏が健在である。さすがに別格本山である。

7・荏原神社（恵比寿）

目黒川に架かる品川橋は江戸時代境橋と呼ばれていた。この川を境に品川宿を南北に分けたという。この橋の上流に架かる朱

塗りの鎮守橋を渡り荏原神社へ参る。入り口の左に石造りの恵比寿様がエビス顔で迎えて下さる。神社の創建は和銅 2 年(709)と伝えられる古社で、南の天王様と呼ばれる品川宿の鎮守である。参拝し社務所で御朱印をいただいた。

8・一心寺（寿老人）

旧東海道で唯一海側にある。街道に面して狭い境内の奥にこじんまりした本堂があって寿老人は内陣に祀られている。真言宗智山派の豊盛山延命院一心寺と称し、成田山分身の不動明王を本尊として祀る。昭和 61 年より東海七福神の寿老人を祀るようになった。

9・養願寺（布袋尊）

一心寺の向かいの細い参道（虚空蔵横丁）の奥に養願寺がある。木造りの布袋尊は本堂の前のお堂に祀られている。本堂には虚空蔵尊が祀られており、毎月 7 の日は虚空蔵尊の縁日である。

10・品川神社（大黒天）

第一京浜国道を見下ろす高台に広大な敷地を持ち、長い石段を登って境内に入ると立派な社殿がある。参拝を終えて御朱印をいただいた。三代徳川家光が東海道の鎮守と定めたという。宝物殿には家光が奉納した葵神輿のほか大、中の神輿がある。毎年 6 月 7 日に近い金、土、日に北の天王祭りが行われ、神輿が出る。石造の鳥居と水盤は下総佐倉城主で家光側近の堀田正盛が寄進したもの。階段下の鳥居の石柱は昇り竜・下り竜が彫られている珍しいものである。

北品川宿の富士講（丸嘉講）の人々が作った富士塚がある。頂上まで登ってみた。見晴らしは良いが、見えるのはビルばかりであった。

今日の七福神巡りはこれをもって無事満願となった。石段下に戻り村田会長のご挨拶があった、午後 4 時頃解散した。

ご案内していただいた方々有り難うございました。ご参加の皆様お疲れ様でした。

大和田新田「善兵衛」家の
聞き取り調査をスタート
藤 由美

18 年度研究調査の新しいテーマは「大和田新田」。12 月例会のフィールドワークを皮切りに少しずつ地域のあらましを知ろうと、聞き取り調査もスタートしました。

まずは、2006 年 1 月 14 日(土)午後から、石井会員宅に白井富美子さん(大正 12 年 4 月生)をお招きして、藤・石井両会員で大和田新田上区の概要や旧家の屋号、民俗行事などについてお聞きしました。

江戸時代、大和田新田は、それぞれの名主の屋号をとって、善兵衛組(上区)と佐五兵衛組(下区)という 2 つの組がありましたが、白井家の富美子さんはその善兵衛家の跡取り娘です。名主家として家に伝えられてきた古文書は、郷土博物館に寄贈され、市史『八千代市の歴史 近世・資料編』*でも多く引用されています。

富美子さんのお話では、上区は、さらに「新木戸」「中木戸」「うらまち」に分かれていたそうです。

白井家は、成田街道の一本松から北へ入って、現在の東葉高速のガードを過ぎた笹塚というところにあり、隣は、分家の「シヨウベイ」家だけで、一本松まで人家はなく、笹塚から大和田小学校まで通うのは、子供の足ではたいへんだったとのこと。またさらに北へ行くと花輪の「キンゼム」家に至ります。白井家の菩提寺は吉橋の貞福寺。

屋敷から裏山に通じる道は「ナカンデミチ」といい、さだかではないが、緑ヶ丘の駅前住宅地になった仲ノ台遺跡のあった山の様です。

12 月例会で訪ねた上区の区長の中台さんは「モッタテシンシヨウ」。つまり、長作の中台家のご息が大和田新田のお嬢さんと財産を「持ち寄って立てた新

宅」なのだそうです。

白井家には、下総を治めよと
言われて伊勢からこの地に入植
したという伝承があり、現在は
上区の神社である神明社は、も
と白井家の氏神様で、白井家で
寄附した神輿があります。

そのほか、大和田新田の旧家
の屋号や、二十六夜講などの民
俗行事や昔のお産のことなどい
ろいろ教えていただきました。

富美子さん、また石井会員に
感謝します。

* 市史掲載の白井家文書一覧

- ・近世
「享和二年三月 大和田新田五人組御仕置帳」P51
- 「文化五年三月 大和田新田善兵衛組村小入用帳」P69
- ・近世
「安永五年正月 日光社参人馬諸かかり取立帳」P6
- 「大和田新田誰右衛門諸国神社仏閣参詣につき往来一札」P10
- 「文化十一年 10 月 大和田新田検使役賄諸入用一件につき議定一札」P348
- ・近世
「文久三年正月 大和田新田月待中諸懸り物帳」P233
- 「文久四年二月 大和田新田生長祝儀ならびに節句覚書」P235
- 「文政九年三月 大和田新田積金講人数覚」P242

千葉県郷土史研連協事務局長
秋葉輝夫氏寄稿

県郷土史研八千代大会

村上の 空晴れ渡り 行く
雲も い行き憚り 八千代市
の 博物館に 開かれし 郷
土史研の 大会の 時代を担
ふ 学徒等の 意欲溢れる
発表に 馳せ参じたる 房総
の 百十余人の 聴衆の 心
は通ひ 拍手どよめく

反歌

学徒等の熱気漲る論説を
胸に刻みし八千代大会

「史談八千代」第 30 号が
発刊されました

「史談八千代」30 号補遺

第 30 号記念寸言集補遺
御巢鷹の尾根にて
桜井 有三

八月は特に思い入れの強い
月である。

誕生月は言うに及ばず、僧侶
の息子であるためか、原爆 / 終
戦記念日、旧盆、果は義父の命
日と続くと何かしら暑苦しい
気候と和してうっとうしい気
分が晴れない。

今年は齢 58 を迎え、益々寂
寥感を覚え、お盆の佐久への帰
省の途中、たまたま御巢鷹の尾
根の墓参を思い立った。思えば
20 年前も前の会社の同僚が日
航機墜事故に遭遇し他人事で
はないと思いながら、通り過ぎ
した場所を始めて訪れた。上野
村から 20 キロ、更に沢沿いの
杣道を 2 キロ程辿ると、今なお
黒こげの巨木も残る狭い尾根
の両端に、粗末な墓標群が訪れ
る家族を待ち続けるかのよう
に、ひっそりと佇んでいた。

今なお老いた人々が人知れ
ずとも慰霊登山を行う姿に、史
実として風化させないための
我々の務めを考えさせられた。

(桜井会員の原稿は、「史談
八千代」編集部の手違いにより、
掲載せずに発刊してしまいました。
深くお詫びし、本紙面に掲
載させていただきます。)



05.12.23 大和田新田神明社三山碑調査

30号記事の訂正とお詫び
市内最古の十九夜塔は
寛文の丸彫り如意輪像
藤 由美

「史談八千代」30号の拙文「高津と八千代市内の女人信仰に関わる石造物の変遷」の文章の中で、「延宝2年(1674)造立の如意輪観音像は」「明らかに十九夜塔、あるいは女人講の供養塔と認識できる石塔として、八千代市内最古市内十九夜講の石仏として最古」と書きましたところ、訂正のご意見を賜りました。

実は、高津の延宝二年の十九夜塔は市内最古ではなく、現在編纂中の市史『八千代市の歴史』草稿中で「初出」としている最古のものは、正覚院釈迦堂の右裏手の寛文11年(1671)10月19日の丸彫り像であるとのことです。

さっそくこのご指摘にこたえて、正覚院へ行きましたところ、確かに正覚院釈迦堂の裏の川嶋家墓地に奥の崖下、夏は灌木に覆われるような斜面に、変わりな姿の如意輪観音像がありました。ただし、首から上は失われて地蔵像らしき頭部が接合され、右腕もありません。



これが十九夜塔と判断できるのは、像の背面の衣に「像立十九夜女人 念仏講衆」と刻まれているからで、さらに銘文は「村上村 池証山(鴨鴛寺)」と続いています。

場所が急斜面の裾部ですので、石像を動かさない限り判読は難しそうですが、『よなもと今昔』6号の村上地区の石造物悉皆調査データによる銘文では「像立十九夜女人 念仏講衆 菩

提也 村上村道 池証山鴨鴛寺 寛文十一辛亥年十月十九日敬白」とことです。

高津の十九夜塔より3年先立つ造立。小ぶりとはいえ、丸彫りの像は、欠損していなければ、さぞ立派な観音像であったことでしょう。

文化財の価値としては惜しい姿ですが、背面の銘文は女人講の成立を示す歴史資料としてたいへん貴重です。

この石像の銘文を記録された『よなもと今昔』の研究会の皆様には敬意を示すとともに、『江戸期の石造物』リストに依存して調査不足であった『史談八千代』30号の拙文の間違ひをお詫びし、会長のご助言で、高津の延宝二年十九夜塔についての「この石塔は八千代市内最古」という文言は、「この石塔は最も像容が整ったものとして八千代市内最古」と、正誤表をもって訂正いたしました。ご指摘どうもありがとうございました。

---- 掲示板 ----

「『史談八千代』索引集」を
差しあげます
佐久間 弘文

『史談八千代』創刊号～第30号までの論文タイトル・語句(地名つき)・執筆者別の論文題目の小冊子ができました。

2千語以上の語句などと、延べ7百名以上の執筆者別論文タイトルを収録した私家版の索引集です。B5版の冊子、表裏印刷で合計61ページ。

限定20部を一部実費百円、郵送希望の場合は冊子小包料190円を追加してください。

お申し込みは、下記の佐久間までご連絡ください。

・メール：
sk-h@abeam.ocn.ne.jp

白井市郷土資料館講座のご案内

- ・2月18日(土)10:00～11:30
- ・演題 「路傍の石造物から知る白井の民俗」
- ・講師 石戸 啓夫 氏(白井市郷土資料館学芸員)
- ・会場 白井市郷土資料館(白井市文化センター3階(北総鉄道白井駅下車徒歩10分))
- ・問合せ先:同館(047-492-1124)

3月5日まで

栗谷遺跡の出土遺物展
八千代市郷土博物館で開催

栗谷遺跡は、縄文から平安時代までの集落遺跡。現在は東京成徳大学八千代キャンパスになっています。

遺跡からは八千代市内でも珍しい弥生中期の集落・方形周溝墓群と、弥生後期の大集落が見つかりました。

この弥生後期の集落から出土した土器群は、繊細な縄文を施された印旛沼周辺の特異な土器群で、北関東と南関東の文化が交差する八千代の地理的重要性も示唆され、今後の地域研究の深化が期待されます。

なお、2月19日午後2時から発掘調査担当者による展示解説があります。

新入会員紹介

青田博之(高津在住)
薄井正志(大和田在住)
三橋俊一(大和田新田在住)
よろしく申し上げます

= 編集後記 =

・郷土史展でのアンケートの感想「心温まる研究報告になりましたね。学術に裏づけられ、豊かな心に裏打ちされた研究発表も、ずいぶん心打たれました。」(感謝!)

・高津の旧家の皆様にも展示をつぶさに見ていただき、地域と一体の調査発表となりました。紙面の関係で詳しい報告が載せられず、残念。

・編集作業ラストに、県郷土史研秋葉氏の長歌を拝受、掲載間にあった。
By.藤 QWR07752@nifty.com